

都の友へ、B生より

国木田独歩

青空文庫

(前略)

ひさ
久しぶりで孤獨の生生活を行つて居る、これも病氣のお蔭
かも知れない。色々なことを考へて久しぶりで自己の存在を
自覺したやうな氣がする。これは全く孤獨のお蔭だらうと思ふ。
此温泉が果して物質的に僕の健康に效能があるか無いか、
そんな事は解らないが何しろ温泉は悪くない。少くとも此處の、
此家の温泉は悪くない。

森閑とした浴室、長方形の浴槽、透明つて玉のやうな
温泉、これを午後二時頃獨占して居ると、くだらない實感か
らも、夢のやうな妄想からも脱却して了ふ。浴槽の一端へ

後脳こうのうを乘のせて一端たんへ爪つまさき先みを掛けうかて、ふわりと身みを浮うかべて眼めを閉つぶる。
 時ときに薄目うすめを開あけて天井てんじやうぎ際はの光線窓あかりまどを見る。碧みどりに煌きらめく桐きりの葉は
 の半分はんぶんと、蒼々さうく無際限むきげんの大空おほぞらが見える。老人らうじんなら南無なむ
 阿彌陀佛あみだぶつくと口くちのうち中うちで唱となへる所ところだ。老人らうじんでなくとも此心このこころも

持ちは同じである。

居室へやに歸かへつて見みると、ちゃんと整頓かたづいて居ゐる。出でる時は書物しょもつ
 やら反古ほごやら亂雜らんざつ極きはまつて居たゐのが、物各ものおのく々ところ所しょを得えて静かしづ
 僕ぼくを待まつて居ゐる。ごろりと轉ころげて大だいの字じなり、坐團布ざぶとんを引寄ひきよせて二ふた
 つに折をつて枕まくらにして又またも手當次第てあたりしだいの書ほんを読み初はじめる。陶淵明とうえんめいの
 所謂いはゆる「不求甚解くらゐまよ」位よは未ときだ可よいが時に一ページよ讀よむに一時間じかん
 かことある事ことがある。何故なぜなら全然まるで他の事ことを考ほかへて居ゐるからである。

昨日も君の送つて呉れたチエホフの短篇集を讀んで居ると、ツイ何時の間にか「ボズ」さんの事を考へ出した。

ボズさんの本名は權十とか五郎兵衛とかいふのだらうけれど、此土地の者は唯だボズさんと呼び、本人も平氣で返事をして居た。

此以前僕が此處へ來た時の事である、或日の午後僕は溪流の下流で香魚釣を行つて居たと思ひ玉へ。其場所が全たく僕の氣に入つたのである、後背の岬からは雜木が枝を重ね葉を重ねて被ひかかり、前は可り廣い瀬が靜に渦を卷て流れて居る。足場はわざく作つた様に思はれる程、具合が可い。此處を發見た時、僕は思つた此處で釣るなら釣れないでも半日位は辛棒が出來る

と思つた。處が僕が釣りはじめると間もなく後背から『釣れますか』と唐突に聲を掛けた者がある。

振り向くと、それがボズさんと後に知つた老爺であつた。七十近い、背は低いが骨太の老人で矢張釣竿を持って居る。

『今初めた計りです。』と言ふ中、浮木がグイと沈んだから合すと、餽釣としては、中々大きいのが上つた。

『此處は可なり釣れます。』と老爺は僕の直ぐ傍に腰を下して煙草を喫ひだした。けれど一人が竿を出し得る丈の場處だからボズさんは唯見物をして居た。

間もなく又一尾上げるとボズさん、『旦那はお手上手だ。』

『だめだよ。』

『イヤさうでない。』

『これでも上手の中かね。』

『此温泉に来るお客様の中じア旦那が一等だ。』と大げさに

贊めそやす。

『何しろ道具が可い。』と言はれたので僕は思はず噴飯だし、

『それじア道具が釣るのだ、ハ、ハ、……』

ボズさん少しく狼狽いて、

『イヤ其は誰だつて道具に由ります。如何ら上手でも道具が悪いと十尾釣れるとこは五尾も釣れません。』

それから二人種々の談話をして居る中に懇意になり、ボズさ

んが遠慮なく言ふ處によると僕の發見た場所はボズさんのあじ
ろの一で、足場はボズさんが作つた事、東京の客が連れて行
けといふから一緒に出ると下手の癖に釣れないと怒つて直ぐ止
す事、釣れないと言つて怒る奴が一番馬鹿だといふ事、温泉に
来る東京の客には斯ういふ馬鹿が多い事、魚でも生命は惜い
といふ事等であつた。

其日はそれで別れ、其後は互に誘ひ合つて釣に出掛け居たが、
ボズさんの家は一室しかない古い茅屋で其處へ獨りでわびしげに住
んで居たのである。何でも無遠慮に話す老人が身の上の事は
なるべく避けて言はないやうにして居た。けれど遠まはしに聞き
成る可く避けて言はないやうにして居た。けれど遠まはしに聞き
だした處によると、田之浦の者で、夫婦は百姓をして可な
ところ

りの生活をして居るが、其夫婦のしうちが氣に喰ぬと言つて十何年も前から一人で此處に住んで居るらしい、そして倅から食ふだけの仕送りを爲て貰つてゐる様子である。成程さう言へば何處か固拗のところもあるが、僕の思ふには最初は頑固で行つたのながら後には却つて孤獨のわび住ひが氣樂になつて來たのであるまい。世を遁がれた人の趣があるのは其理由であらう。

其處で僕は昨日チエホフの『ブラツクモンク』を讀さして思はずボズさんの事を考へ出し、其以前二人が溪流の奥深く泝つて「やまめ」を釣つた事など、それからそれへと考へると堪らなくなつて來た。實は今度來て見ると、ボズさんが居ない。昨年田之浦の本家へ歸つて亡なつたとの事である。

事實、此世に亡い人かも知れないが、僕の眼にはありくと見み

える、菅笠を冠つた老爺のボズさんが細雨の中に立て居る。

『病氣に良くない、』『雨が降りさうですから』など宿の者が

とめるのも聞かず、僕は笠を持って出掛けた。人家を離れて四五丁
も沂ると既に路もなれば畠もない。たゞ左右の斷崖と其

間を迂回り流るゝ溪水ばかりである。瀬を辿つて奥へ奥へと

沂るに連れて、此處彼處、舊遊の瀬の小蔭にはボズさんの菅

笠が見えるやうである。嘗てボズさんと辨當を食べた事のあ

る、平い岩まで來ると、流石に僕も疲れて了つた。元より釣る氣

は少しもない。岩の上へ立てジツとして居ると寂しいこと、静か

なこと、深谷の氣が身に迫つて來る。

暫時くすると箱根へ越す峻嶺から雨を吹き下して來た、霧のやうな雨が斜に僕を掠めて飛ぶ。直ぐ頭の上の草山を灰色の雲が切れ／＼になつて駆る。

『ボズさん！』と僕は思はず涙聲で呼んだ。君、狂氣の眞似をすると言ひ玉ふか。僕は實に満眼の涙を落つるに任かした。

(畧)

青空文庫情報

底本：「定本 国木田独歩全集 第四巻」学習研究社

1966（昭和41）年2月10日初版発行

1978（昭和53）年3月1日増訂版発行

1995（平成7）年7月3日増補版発行

入力：鈴木厚司

校正：mayu

2001年11月7日公開

2004年2月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

都の友へ、B生より

国木田独歩

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>